

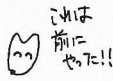
直線上の点, 平面上の点



これはマジで大切やぞ~

ある点Pが、与えられた直線や平面上に存在する(のっかている)ための条件を考えよう。
この考え方は、図形のいろいろな問題に応用される重要な考え方で、必ずマスターしよう。

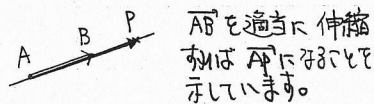
☆直線上の点
(2点A, Bは異なる点とする)



これは前にやった!!

点Pが直線AB上にある
⇔ $\vec{AP} = t\vec{AB}$ とする実数tが存在する

(始点はBでもOK。Aを始点に考えたのは、後ほどの式の形の美しさを考えたこと。たまたま。)



よて、このとき

$$\vec{OP} - \vec{OA} = t(\vec{OB} - \vec{OA})$$

$$\vec{OP} = (1-t)\vec{OA} + t\vec{OB}$$

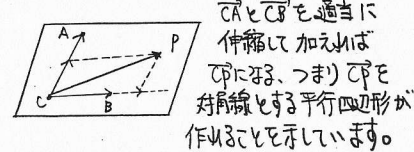
$1-t = s$ とおくと

$$\vec{OP} = s\vec{OA} + t\vec{OB} \quad (s+t=1)$$

☆平面上の点
(3点A, B, Cは同一直線上にない異なる点とする)

点Pが平面ABC上にある
⇔ $\vec{CP} = s\vec{CA} + t\vec{CB}$ とする実数s, tが存在する

(始点はAでもBでもOK。Cを始点に考えたのは、後ほどの式の形の美しさを考えたこと。T=たまたま。)



よて、このとき

$$\vec{OP} - \vec{OC} = s(\vec{OA} - \vec{OC}) + t(\vec{OB} - \vec{OC})$$

$$\vec{OP} = s\vec{OA} + t\vec{OB} + (1-s-t)\vec{OC}$$

$1-s-t = u$ とおくと

$$\vec{OP} = s\vec{OA} + t\vec{OB} + u\vec{OC} \quad (s+t+u=1)$$

Point 1
点Pが直線AB上にある
⇔ $\vec{AP} = t\vec{AB}$ と表せる ... ①
⇔ $\vec{OP} = s\vec{OA} + t\vec{OB}$ と表せる
($s+t=1$) ... ②

Point 2
点Pが平面ABC上にある
⇔ $\vec{CP} = s\vec{CA} + t\vec{CB}$ と表せる ... ③
⇔ $\vec{OP} = s\vec{OA} + t\vec{OB} + u\vec{OC}$ と表せる
($s+t+u=1$) ... ④

☆3点を通る直線

Point 1
3点A, B, Cが同一直線上にある
⇔ 直線AB上に点Cが存在する

2点を通る直線は、ただ1本存在しますが、3点を通る直線は、存在しません。3点を通る直線を考えるときは、「2点を通る直線上に残りの1点か、のっかている」と考えます。

☆4点を通る平面

Point 1
4点A, B, C, Dが同一平面上にある
⇔ 平面ABC上に点Dが存在する。

3点を通る平面は、ただ1枚存在しますが、4点を通る平面は、存在しません。4点を通る平面を考えるときは、「3点を通る平面上に残りの1点か、のっかている」と考えます。

③と④は、それぞれ全く同じ意味ですが(変形しただけ)、どちらを利用するのは、状況に応じて判断する必要があります。一長一短です。例えば次のような問題の場合。
(問) "A(3,1,2), B(4,2,3), C(5,2,5), D(-2,-1,3)が同一平面上に存在するかどうかを求めよ"

③を利用すると... $\vec{AD} = s\vec{AB} + t\vec{AC}$ より

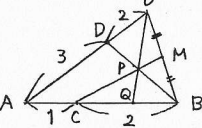
$$\begin{pmatrix} -5 \\ -2 \\ 3 \end{pmatrix} = s \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 3 \end{pmatrix}$$

④を利用すると... $\vec{OD} = s\vec{OA} + t\vec{OB} + u\vec{OC}$ ($s+t+u=1$) より

$$\begin{pmatrix} -2 \\ -1 \\ 3 \end{pmatrix} = s \begin{pmatrix} 3 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} 4 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix} + u \begin{pmatrix} 5 \\ 2 \\ 5 \end{pmatrix}$$

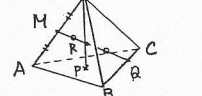
→ このように文字の数、式の数が増えちゃうので、この場合は③を利用するのがbetterです。しかし次のような問題の場合は②, ④を利用するのがbetterです。

△ABCにおいて、辺OBの中点をM、辺ABを1:2に内分する点E、辺OAを2:3に内分する点D、直線CMと直線BDの交点をPとする。
(1) \vec{OP} を \vec{OA} , \vec{OB} で表せ。
(2) 直線OPと辺ABの交点をQとすると $AQ:QB$ を求めよ。



<考え方> (1)は基本問題。(2)は $\vec{OQ} = k\vec{OP}$ とし \vec{OQ} を求めることから始めます。
(解) (1) CP:PM = 3:1, BP:PD = 1:t とすると
△OCMについて $\vec{OP} = (1-s)\vec{OC} + s\vec{OM} = (1-s)\frac{2\vec{OA} + \vec{OB}}{1+2} + s\frac{1}{2}\vec{OB} = \frac{2(1-s)}{3}\vec{OA} + \frac{2+s}{6}\vec{OB}$
△OBDについて $\vec{OP} = (1-t)\vec{OB} + t\vec{OD} = (1-t)\frac{2}{3}\vec{OA} + t\vec{OB}$
 \vec{OA} と \vec{OB} は1次独立だから、 $\frac{2(1-s)}{3} = \frac{2(1-t)}{3}$, $\frac{2+s}{6} = t$, $\therefore s = \frac{2}{3}$, $t = \frac{4}{9}$, $\vec{OP} = \frac{2}{9}\vec{OA} + \frac{4}{9}\vec{OB}$
(2) $\vec{OQ} = k\vec{OP} = k(\frac{2}{9}\vec{OA} + \frac{4}{9}\vec{OB}) = \frac{2k}{9}\vec{OA} + \frac{4k}{9}\vec{OB}$
Qは辺AB上にあるので $\frac{2k}{9} + \frac{4k}{9} = 1$, $\therefore k = \frac{3}{2}$ よて $\vec{OQ} = \frac{1}{3}\vec{OA} + \frac{2}{3}\vec{OB} = \frac{1\vec{OA} + 2\vec{OB}}{2+1}$
 $\therefore AQ:QB = 2:1$

四面体OABCにおいて、辺OAの中点をM、辺BCを2:1に内分する点E、線分MOの中点をRとし、直線ORと平面ABCの交点をPとする。
 \vec{OP} を \vec{OA} , \vec{OB} , \vec{OC} で表せ。



<考え方> まずは \vec{OR} を求めよう。前問と同様に $\vec{OP} = k\vec{OR}$ とし k を求めよう。
(解) $\vec{OR} = \frac{1}{2}(\vec{OM} + \vec{OR}) = \frac{1}{2}(\frac{1}{2}\vec{OA} + \frac{1\vec{OB} + 2\vec{OC}}{2+1}) = \frac{1}{4}\vec{OA} + \frac{1}{6}\vec{OB} + \frac{1}{3}\vec{OC}$
 $\vec{OP} = k\vec{OR} = \frac{k}{4}\vec{OA} + \frac{k}{6}\vec{OB} + \frac{k}{3}\vec{OC}$
Pは平面ABC上にあるので $\frac{k}{4} + \frac{k}{6} + \frac{k}{3} = 1$, $\therefore k = \frac{4}{3}$, $\therefore \vec{OP} = \frac{1}{3}\vec{OA} + \frac{2}{9}\vec{OB} + \frac{4}{9}\vec{OC}$

特定の面や断面に注目します。